

「土曜の放課後2」第11回

京都学派とメディアアート

2026年1月17日 (土) 14:00-16:00

於 京都市立芸術大学 C棟3階 講義室7

まず「京都学派」とは、いったい何なのでしょう？ いろんな分野における「京都学派」があります。いちばん有名なのは哲学で、明治44年から昭和3年まで京都大学文学部で教えていた西田幾多郎（1870-1945）がその中心です。彼が思索しながら歩いたという「哲学の道」は、今では京都の主要な観光資源の一つになっています。しかしこれは「日本アルプス」や「日本ライン」などと同じ一種の本歌取りであって、その元ネタはハイデルベルクにある「哲学者の道（Philosophenweg）」です。

それはともかく、哲学分野では京都大学で教えていた西田やその後を継いだ田邊元（1885-1962）、彼らの影響を受けた和辻哲郎（1886-1960）や西谷啓治（1900-1990）、下村寅太郎（1902-1996）などを含む一群の思想家たちが、「京都学派」と呼ばれています。その主流は政治的に見ると右派と言えますが、三木清（1897-1945）や中井正一（1900-1952）のような左翼思想家も属しています。また、京都に特につながり深いわけではないが、西田に大きな影響を与えた鈴木大拙（1870-1966）を含めてもいいと思います。禅を西洋哲学の概念で解明し世界思想史の中に位置付けるというのが、京都学派にとって主要課題の一つだったからです。

哲学以外では、内藤湖南（1866-1934）に発する京大の東洋史学、マルクス主義経済学の柴田敬（1902-1986）に始まる経済学部の教授たち、さらに戦後においてはフランス文学者の桑原武男（1904-1988）がリードした京大人文科学研究所、生態学・霊長類学の今西錦司（1902-1992）に始まる進化論・生物研究の流れ、また木村敏（1932-2021）に代表される京大医学部の精神医学の伝統もまた、「京都学派」と呼ばれることがあります。

これら様々な分野の学説について何が「京都学派」の特徴なのかを議論し始めると非常に面倒なので、ここでは大枠を設定しておきます。「京都学派」の意味は、「京都大学」ないし近代日本における「京都」という場所のあり方によって規定されています。つまり、「東京」が近代化＝西洋化の中心となってきたのとは異なって、一方的な近代主義（進歩主義／グローバリズム）からは距離を取り、近代化を拒否するわけではないが、それを日本固有の思想的基盤から「解釈」する場としての「京都」、つまり近代と伝統とを融合するという課題を担う場所が「京都」だということです。

この「解釈」や「融合」にはさまざまなあり方が考えられますが、大雑把に言えばそうした動機づけが、「京都学派」という言葉に意味を与えてきたのだと思います。では、そこで参照されてきた「日本固有の思想的基盤」とは何か？ これについても色々考えることができます。それは共生の理想としての「和（聖徳太子「和為貴」）」であったり、脱人間中心主義（「山川草木悉皆成仏」）であったり、縄文文化やアニミズムであったり、密教や禅であったりします。共通点は、そうした基盤を前近代化的な過去の遺物、たんなる文化遺産と見るのではなく、その中に何らかの積極的価値を、さらに言えば近代を突破する可能性を見出そうとする点です。これが「京都学派」の真髄だと思います。そしてこれは、狭い意味での哲学的立場であることを超えて、世界史をどう捉えるかとい政治的な立場に繋がってゆきます。

シンガポールを拠点に活動するアーティストのホー・ツーニェン（Ho Tsu Nyen, 1976-）は、2017年頃から日本の近代史に関心を持ちはじめ、京都学派を取り上げた映像インスタレーション作品「Voice of Void」「旅館アポリア」を制作しました。そこには、哲学における京都学派に属

する大島康正（1917-1989）が記した「大島メモ」という記録が使用されています。昭和17年以降、大日本帝国海軍は少将高木宗吉を通して京都学派の哲学者たちと接触し、政局を議論する秘密の会合を定期的に組織しました。その内容を、当時京都帝国大学文学部講師であった大島が記録したものが「大島メモ」と呼ばれる資料で、これは比較的最近（2000年）たまたま発見されたのだそうです。それを読むと「京都学派」の基本的な課題（近代西洋と日本精神の融合）を、当時の世界政治的な文脈で解釈すること（「八紘一宇」を思想として確立する、等々）が話し合われています。

哲学における京都学派の中心に位置するのは西田幾多郎です。西田はその文章や用語が難解であることで有名ですが、西洋と日本の融合という課題ということから考えるなら、それほど難解であるわけでもないと思います。西田哲学の用語はたしかに異様で独特ですが、難解であるというよりも、言葉としてパワフルであり、哲学好きの読者を魅了する力を持っていると思います。わたしにとって西田哲学は、どこか太宰治の小説と似ています。わたしは太宰治の文体を感心しながら読んできましたが、太宰に心酔するファンと話すのは苦手なんです。同じように西田の著作も読みますが、西田哲学の信奉者とは話がしにくいのです。それは彼らの作り出す世界が、「分かるよね?」「うん、分かる」、「分かれ!」「分かった!」というような、言葉を超えた世界を前提したコミュニティだからです。哲学にはたしかに直観的認識という側面がありますが、同時に延々と続くおしゃべりでもあります。その両方でバランスを取ることが重要だと思いますが、西洋と日本の融合を目指す「京都学派」は、一般に直観に傾きすぎであると私は感じています。

アートも哲学同様、直観とおしゃべりとで成り立っていますが、その中でも「メディアアート」と呼ばれるものは、やはり直観への依存度が高いとわたしは感じています。「京都学派」が禅のような非言語的認識に魅了されるのと同じように、メディアアートはテクノロジーの持つ、言語を越えた魅力に圧倒されているからです。メディアアートといっても具体的に何を指しているのかということですが、ここではテクノロジーがその芸術表現の主要部分を占めているという大雑把な定義にとどめておきます。ホー・ツーニェンの作品だって広い意味ではメディアアートと呼べますが、それは具体的歴史を参照するおしゃべりに満ちています。それに対してここで言うメディアアートとしては、昨年10月このすぐ近所にオープンした「チームラボ バイオボルテックス京都」のようなものを例にした方が考えやすいと思います。

テクノロジーは徹底的に操作化された言語——プログラム言語のような——によって実現されていますが、テクノロジーが人間に対して現れる仕方は、超言語的で魔術的です。そして禅と同じように、メディアアートは自己と対象、時間や空間についての、私たちの素朴な意識を揺さぶり、その背後に言語を越えた何かとても深淵な洞察があるかのような直観をもたらします。これがテクノロジーの魅力的でもあり、危険でもあるところです。これはいわゆる「アート」に限定されているわけではなく、わたしたちがスマホを通して朝から晩までネットにアクセスしている状況の背後にも潜んでおり、その意味で私たちは知らないうちにメディアアートを「生きて」いるとも言えます。利便性は見かけ上のことで、それによって現代的な生の美的な本質が見えなくなっているだけです。

テクノロジーは一見、具体的な歴史や文化を越えた中立的なものに見えますが、現在わたしたちが「テクノロジー」と呼んでいるものの根底には、近代西洋的な存在論、世界観、哲学・論理が潜在しています。それらは学術研究やその産業的応用のような合理的領域ではハッキリ意識されませんが、アートという場では姿を現します。その意味でメディアアーティストは——本人が意識するか否かに関わらず——否応なく「哲学している」ことになるのです。とりわけ日本を含む非西洋諸国のアーティストは、西洋的な論理を非西洋的精神といかに融合するかという、「京都学派」とパラレルな課題に立ち向かっているとと言えるでしょう。